

丈の宮と俗稱しけるを以て、于今至り傳稱するか。といへり。さて櫻木の八幡は、其の以來神職社人もなく、山伏寶高寺の持宮なりし故に、舊記・由來書もなく、其の來歴詳かならず。然るに明治五年十一月村社に列せられ、社號を櫻木神社と定められしゆゑ、氏子も殊に奮發し、社殿を莊飾して崇敬する事とは成りたりといへり。

○百人組地跡

櫻木神社の地邊より、泉野新村と長坂新村との間なる畠地をば、百人組の組地の舊址なるよしひ傳へたり。今は悉く畠地と成りたれど、井戸の跡多くありて、地の陥る事常々ありといへり。

○百人組者傳話

三壺記に云ふ。寛永十一年には將軍家光公御上洛に付き、諸國の大名衆皆々歸國せられ、國元より直に上洛也。中納言利常卿は、寛永八年十二月以來御在江戸なりしが、卯月下旬に御歸城被成。借御城中玉泉院殿御屋形の跡を御露地に可被仰付とて、大橋又兵衛・瀧長兵衛などに被仰渡、先づ地形の土をならませて、泉水などに可被成所の土をば、

町方へ可被下旨御觸にて、毎日取り行く程に、頓て谷峰と成りにけり。其の間に御用意出來、五月下旬金澤御發駕被成、閏七月家光公御上着、頓て御下向に付、利常卿も御歸國被成、御着城の翌日より玉泉院丸へ御出で、京都より被召寄たる劔左衛門と云ふ山作りに被仰付、築山・泉水・御亭等前代未聞なる事なり。能州より在々所々を尋ね、かゝりの能き植木・石等を取寄せられ、御直に御指圖被成、其日々々の奉りを以て、諸奉行勤めける程に、惣御奉行は殿様也。人足は御相撲の者五十人、百人者と名付けて御鐵炮の者共也。御目通り之外は役人御小人也。此の百人者と申す者は、去る寛永七年に御本丸の御露地に御數奇屋被仰付。其の時鐵炮之者の内を、器量能き若者共百人すぐり出し、諸の足輕役御赦免被成、佃源太郎を頭に被仰付、御前にて御直に被召仕ゆゑ、何茂出頭仕、有度儘に伊達を致し、餘り御念比に候故、大橋市右衛門に被仰付、一人に朱銀二百目宛御式臺に而被仰渡、利なしに被仰付。是を式臺のなげかしの二百目銀とぞ申しける。江戸詰致し候へば、中飯扶持とて一人半の扶持方被下、出銀の心持に七俵米を被下。

○櫻 畠

今櫻畠一番丁より十番丁まであり。此の地は犀川欠の高にて、吹屋坂邊より吹上・闕野邊の惣名にて、櫻木と呼べる地も、舊名を櫻畠と稱し、一緒の地なりとぞ。昔は泉野新村の荒地にて、人家もなく、櫻樹のみ植ゑありしゆゑに、櫻畠の名起れりといへり。

○櫻畠來歴

舊傳に云ふ。泉野櫻畠の地は、金澤府城の南方にて、本丸より眺望するに實に眼下に見渡せり。故に昔利常卿、此地邊に櫻樹數百株の植付を命ぜられたりといへり。按ずるに、有澤武貞の金澤細見圖譜に、芳春院殿金澤城東丸に御座被成、逝去後利常卿御生母壽福院殿此に居給ふ。今東丸の塀に有之八板戸・四板戸と云ふものは、東丸御座所より遠望の爲めに作り置くと云ひ傳ふ。とあり。右八板戸・四板戸は、高石垣の太鼓塀に、所謂大將窓と稱し、開戸あるをいへり。思ふに、右遠望の爲に、櫻畠の櫻木も植ゑしめられしにや。三壺記に、元和三年の頃瀧與右衛門に仰付けられ、犀川の欠の上野に柿木畑・栗林・葡萄棚、山のかたはし

然るに佃源太郎、餘りに難有被成様也、御供中に一人半扶持之者又ともなしとて、一人扶持に致し、半扶持上げられば、目安にて御なげき可申上旨、百人者共證議致しけれども、内輪より佃へかへり忠の者有りて、それも不叶成りにけり。然るに此の百人者と御相撲取五十人、輕々敷出立にて、御意に随つて働きければ、頓て御露地出來すと云々。按ずるに、今櫻木神社の邊なる百人組の組地跡といひ傳ふるものは、右佃源太郎が裁許せし百人者の組地なるべく覺ゆ。今此の地をば百人町と呼べりとぞ。

○寶塔山妙法寺

法華宗也。俗に會津妙法寺と呼べり。由來書に云ふ。當寺京都本正寺の末にて、寛永九年本法院日照、寺地百步拜領建立。とあり。

○常秀山安立寺

法華宗也。由來書に云ふ。當寺京都本山上行寺日應聖人、金澤に檀那有之に付、末寺造立致し度由發起、横山山城守家人塚本伊左衛門を以相伺、寛永五年取立。とあり。右兩寺共寛永年中の創立にて、外に來歴なき寺院なり。